

「神の賜物としての幸せ」

安藤 脩

伝道者の書 3 章 9～13 節

働く者は労苦して何の益を得るだろうか。

私は、人の子らに従事するようにと与えられた仕事を見た。

神のなさることは、すべて時になんて美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。

私は知った。人は生きている間に喜び楽しむほか、なにも良いことがないのを。

また、人がみな食べたり飲んだりして、すべての労苦の中に幸せを見出すことも、神の賜物であることを。

昨年ご奉仕させていただき、説教が終わったとたん、洪先生から講壇のその場で、「来年もお願いします。このメッセージは未だ終わっていない連続ものですよね！」と言われました。一昨年、昨年と、救われ受洗、そして、召命と献身について語らせていただきました。ご要望に応じて本日は、伝道者としての歩みについて語らせていただきます。

私が学んだ神学校は予科 1 年、本科 3 年で、幸い私は本科からの学びでした。でも 3 年目の中頃には、5 年間で蓄えた資金も尽きてしまいました。幸い、伝道者を志す者への奨学金を、奉仕していた教会が準備してくださったので、それを頂くことができ学びを続けることが出来ました。

でも私には、神学校のテストの他にもう 1 つ、テストを主は計画していました。卒業間近のある日、1 本の電話が来ました。「おさむちゃん、吹上のお家が火事になって、おさむちゃんが置いていた荷物も全部焼けてしまった！」という、鹿児島でカトリックのシスターをしている姉からの電話でした。青天の霹靂と言いましょか、本当に驚きました。でも、あり得ないことですが、数分もしないうちに心の内から喜びが湧いてきたのです。それは「アッ！私は変えられている！」という喜びでした。一昨年のメッセージで「私は豊かではないが、そんなに貧しくもない家庭に育った」と言いました。だからでしょうか物を大事にするというか、物への執着心は強くありました。でも、火事で全てを失った時、もう二度と手にすることの出来ない写真等、残念だなとは思いましたが、しかし残念さよりも、「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくて良いのです。これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」(マタイ 6 : 31～33)と主が言われたように、「主が私を必要としてくださるなら、生きるに必要な物は、全て与えて下さる」との確信から、何の不安も感じなかったのです。それが、「アアー、私は変えられたのだ！ 主が私を、主のものとして造り変えてくださっている！」という喜びでした。

日本基督教団の中にある私の属している団体はホーリネスの流れで、神学校を卒業して遣わされる教会は、卒業式のその日、派遣式も兼ねられており、その日、初めてどこの教会に行くか発表されるのです。鹿児島生まれの私は南と思いきや、本州の最北・青森県の三沢にある大三沢教会でした。この教会は90歳を超えた牧師が居られました。30名ほどの教会なので、二人の牧師を支えることは困難でした。それで私の謝儀では生活できないから、食事は信徒の方のお家に行くようにということでした。住まいは教会の塔の下の一室でした。でも私は、5年間働いて得た物をすべて実家に預けて神学校に入り、それが全部焼けたのでしたから、私の持ち物は布団と神学校で学んだ本、買い集めた古本のみでした。ですから、この1室のみで充分でした。

幸い謝儀は倍、倍と増え、2年目、神学校の恩師が結婚の世話をしてくださいました。ここと同じ日本同盟基督教団の恋が窪キリスト教会で伝道師をしていた、現在の連れ合いです。私は神学校時代、団体の大会で独唱したり、学生の合唱の指揮をしていましたから、賛美の好きな恩師が目を留めてくださったのでしょう。また、ご自分の教会の信徒の娘が伝道者となり、未だ独り身だということを中心に掛けていてくださったようで、「石谷夫妻の娘と安藤さんどうか？」ということで、引き合わせて下さったのです。妻・善枝の心境は本人に聞くのが一番良いのですが、「結婚するなら、何も持たず、唯、主の御用に精一杯つくしている人」と決めていたようで、何も持っていない私はピッタリあてはまったのかもしれませんが。教会では喜んで迎えて下さり、礼拝堂に続く、閉園となっていた園舎の上に副牧師館を増築してくださいました。

2年近く経った頃、私どもに第1子が与えられました。教会の方々は大変良くしてくださいましたが、善枝は心細かっただろうと思います。この時、義父母はジャイカの働きでエジプトに行っていました。でもかわりに義姉(今はめぐみ教会の会員である)石谷洋子姉が、下の娘を連れて三沢に駆けつけて下さり、赤ちゃんの湯あみのさせ方から、世話の仕方等を泊りがけで教えてくれました。本当に心強かったです。このことを話したのは、私どもがこのめぐみ教会に繋がる出来事だからです。

ここにいる誰よりも早く、清野先生ご夫妻と交わりを持っていたのは、私ではないでしょうか？ 義父のジャイカでの働きは、エジプトの次にインドネシアでした。義父母はインドネシアのジャパニーズ・クリスチャン・フェローシップで礼拝を守っており、その時、宣教師として来ていたのが清野先生ご夫妻だったのです。そして義父母が私をインドネシアの旅に招いてくれました。そして義父から「インドネシアに来る時、伝道用フィルムを持って来るように」と依頼されました。インドネシア空港には清野先生ご夫妻も来られるということでした。私はフィルムをすぐ渡せられるようにと、バッグの最上部に置いていたのです。しかしイスラム教国のインドネシアでは、そのようなフィルムは持ち込みが難しい。没収になることはないだろうが、取調室に連れて行かれ、言葉のわからない脩さんは困惑するだろうと義父は気をもんだとのことでした。

でも荷物検査のためフィルムの入ったバッグを台の上に乘せた、まさにその時、空港の電灯が消えたのです。空港が停電なんて本来あり得ないことですが、これはきっと主が哀れんでなしてくださったと受け止め、申し訳ないけど、その隙にそのフィルムの入ったバッグを先に押し、次のバッグを台に乗せました。これで荷物検査は何事もなくパスしました。「主が共にいて助けて下さった！」と奇跡的出来事をもってインドネシアの旅はスタートしました。それからの2週間、清野先生ご夫妻が初めてお会いしたばかりの私をインドネシアの各地に連れて行ってくださいました。真に思いで深い旅になりました。

このような義父母と清野先生ご夫妻のインドネシアでの交わりがあったからこそ、清野先生ご夫妻がめぐみ教会の牧師として着任なさった時、義父母も又、めぐみ教会に転会させていただいたのです。そして義父母は今ピスガに眠っています。そして私も石谷類造・茉莉という義父母との関係で、ここめぐみ教会の交わりに加わらせていただいております。

伝道者は言います。「私は知った。人は生きている間に喜び楽しむほか、何も良いことがないのを。」(12節)と。皆さんもそうですか？今、幸せですか？何を幸せと感じていますか？「食べたり飲んだりする」(13)ことですか。食べたり飲んだりすることは生きることを意味します。そのためには働かねばなりません。でも伝道者は「働く者は労苦して何の益を得るのだろうか。」(9節)と言います。また「人がみな食べたり飲んだりして、すべての労苦の中に」(13節)とも言います。そうです。時を間違えると幸いではなく、人生は労苦になるのです。

私の生まれ故郷、鹿児島島の桜島・古里には林芙美子の「花のいのちはみじかくて、苦しきことのみ多かりき」という歌碑があります。

神がくださる時、チャンスを逃がすと人生は「苦しきことのみ多かりき」になります。私にとって東京芸大受験失敗もクリスチャンになっていなかったら苦しみだったでしょう。「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませる」(ローマ1章17節)とパウロが言うように、神の義を追い求め、信仰を深めていなかったら、実家の火事で全ての物を失ったことも苦しみでしかなかったでしょう。でも「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。」(11節)とあります。神の与えたもうチャンス・時をつかむなら、人が労苦と思う中に幸せを見出すことが出来るのです。神の御旨を知り、神の導きに従う時、「神が人の子らに従事するようにと与えられた仕事」(10節)が労苦だったとしても、神の賜物として受けとめる信仰にまで深められたい。そうすれば「すべての労苦の中に幸せを見出すことも、神の賜物である」(13節)のみ言葉は、あなたのものになるのです。パウロが言うようにそれは「人知をはるかに超えたキリストの愛」(エペソ3章19節)によってもたらされるものです。